序　文

HALS（hand-assisted laparoscopic surgery）の歴史と変遷については「総論」で詳述されているので省略するが，1990年代に登場した laparoscopic surgery の応用として，いろいろな施設で行われていたと推測される．ちなみに私自身の鏡視下手術の Erste は HALS による前方切除術であった．

HALS は PneumoSleeve や Hand Port System の出現をきっかけとして，その後短期間に急速な普及を遂げた．周知のように本邦では pure laparoscopic surgery が主流となり，HALS の適応は一部に限られた．一方，欧米では小切開創から腹腔内に片手を挿入するハイブリッド腹腔鏡下手術，いわゆる HALS が現在もなお継続して普及している．HALS では手が邪魔して視野を悪くするなどの短所がある反面，触診できる，強い牽引力を得ることができる，ポート数を減らせるなどの利点もある．しかも pure LACS（laparoscopy-assisted colorectal surgery）では，円滑なカメラ操作を含め習熟した外科医が 3 人以上必要で，非効率的かつ手術時間が長すぎるために，麻酔科医や手術室，および外科スタッフの確保が問題視され，近年 HALS が見直されてきている．

HALS 研究会（HALS research group）は 2010 年に発足し，その年の 6 月に第 1 回 HALS グループミーティングを企画した後，現在までに第 4 回まで開催し，賛同メンバーも徐々に増え，活発化しつつある．今回本書の刊行を企画したのは，このような研究会活動の盛り上がりとともに，将来的に再認識されるであろう HALS の基本事項をおさえておくことが一つの大きな目的である．それに加えて，さまざまな学会や研究会で，「HALS を行いたいが，ポート位置や手の刺入切開部の位置すらわからないし，そもそも HALS に関する参考書がない」との若手外科医の不満を多く耳にし，このような熱い要望に応える義務感のような思いもあった．確かに書店では HALS に関するまとまったテキストはあまり見かけない．

このように HALS はまだ確立されたものではなく，試行錯誤を積み重ねている途上と言えるが，鏡視下手術の技術普及の過程で安全性，確実性に関して十分すぎるほどの配慮を行ったうえで，グループミーティングを通じて標準化されつつあるのが現状である．したがって，編集執筆にあたっては，実際に HALS を多数経験している HALS 研究会世話人の skillful な外科医を核とし，板橋道朗，松田　年，向井正哉を編集主幹に，山名哲郎，石坂和博には「各論」の執筆で参画してもらった．各項目の執筆担当は，彼らを中心とした HALS 研究会のアクティブメンバーを中心に選ばせていただいた．

「総論」として HALS の歴史や今後の展望，セットアップや器具の紹介，そして最も大切な左手の使い方にページを割いた．「各論」としては食道，胃，大腸，肝胆膵脾などの消化器疾患のみならず，呼吸器疾患や泌尿器疾患の HALS も加えた．全体的なコンセプトとしては，手術手技書なので図や写真を駆使して，ビジュアル的な要素を重視したテキストにするようにした．イラストレーターの坂根　潤氏には執筆者の細かい要望に応えてもらうために何度も描き直してもらうことになり，誠に申し訳なく思っている．さらに DVD 付録として左手の使い方（胃・腸），肺楔状切除術，下部直腸癌手術，脾臓摘出術，膀胱全摘術，根治的腎摘除術など約 1 時間の video 動画を付録とした．是非イメージトレーニングに役立てていただきたい．

執筆者は全員第一線で活躍中の現役外科医である．超多忙な臨床業務の合間をぬって，限られた時間内に執筆する形になったので，まだまだ未完成な点，力不足のところも多々あろうかと思う．しかし，読者の方々には HALS の現状をご理解，ご寛容のうえ，宜しければご意見，ご指摘をお寄せいただきたいと願っている．本書を HALS のさらなる発展に活かすことができれば，望外の喜びである．

最後に執筆者の先生方はもとより，企画・出版に際し何度も足を運び，親身にご助言，ご協力いただいた（株）南江堂の倉持隆史氏，多田哲夫氏には心より感謝申し上げる．

2014 年 9 月

東京女子医科大学第二外科
HALS 研究会　代表世話人　亀岡信悟